

ベッセル過程のパラメータ依存性について

種村 秀紀 (千葉大 理)

勉強会「Loewner 方程式とSLE」

13 February 2010

参考文献

G. F. Lawler, *Conformally Invariant Processes in the Plane*, (American Mathematical Society, 2005).

香取眞理, Summer School 数理物理 2009 「ベキ乗則の数理」における講義ノート (2009 年 8 月 27-29 日, 東京大学大学院数理科学研究科, 駒場)

1. d -次元ベッセル過程 (BES_d) の定義

d 次元ブラウン運動 $B_t = (B_t^1, B_t^2, \dots, B_t^d)$ ($d \in \mathbb{N}$) の動径成分

$$X_t = |B(t)| = \sqrt{\sum_{j=1}^d (B_t^j)^2}$$

を d -次元ベッセル過程 (BES_d) という. $F(x_1, x_2, \dots, x_d) = \sqrt{\sum_{j=1}^d x_j^2}$ とし

て, $|F(B(t))|$ を伊藤の公式を用いて計算すると, X_t が確率微分方程式 (stochastic differential equation, SDE) は

$$dX_t = dB_t + \frac{d-1}{2} \frac{1}{X_t} dt \quad (1)$$

をみたすことが分かる.

$$\therefore \frac{\partial F}{\partial x_k} = \frac{x_k}{F}, \quad \frac{\partial^2 F}{\partial x_k^2} = \frac{1}{F} - \frac{x_k^2}{F^3}$$

$$\sum_{k=1}^d \frac{\partial^2 F}{\partial x_k^2} = \frac{1}{F} \left\{ d - \frac{1}{F^2} \sum_{k=1}^d x_k^2 \right\} = \frac{d-1}{F}$$

なので，伊藤の公式と， B_t^1, \dots, B_t^d の独立性 $dB_t^k dB_t^\ell = \delta_{k\ell} dt$, $1 \leq k, \ell \leq d$ より

$$dX_t = \frac{1}{X_t} \sum_{k=1}^d B_t^k dB_t^k + \frac{d-1}{2} \frac{dt}{X_t}$$

となる．ここで，マルチンゲール部分の二次変分をとると，

$$\left(\frac{1}{X_t} \sum_{k=1}^d B_t^k dB_t^k \right)^2 = \frac{1}{X_t^2} \sum_{k=1}^d (B_t^k)^2 (dB_t^k)^2 = \frac{1}{X_t^2} \sum_{k=1}^d (B_t^k)^2 dt = dt$$

であるから，マルチンゲール部分は， $\{B_t^j\}_{j=1}^d$ とは別のBM, B_t である．

確率微分方程式

$$dX_t = dB_t + \frac{d-1}{2} \frac{1}{X_t} dt \quad (1)$$

は $d \geq 1$ であれば、整数でない場合でも非負である解の存在性と一意性が示され、 X_t が拡散過程（強マルコフ、道が連続）であることも分かる。 $d \geq 1$ の実数に対しても (1) の解で与えられる確率過程をベッセル過程という。

ベッセル過程のパラメータとして、次元 d の代わりに ν を使うことも多い。

$$\nu = \frac{d-2}{2} \geq -\frac{1}{2} \quad \iff \quad d = 2(\nu + 1) \geq 1 \quad (2)$$

この ν は、ベッセル関数の確率密度関数および生成作用素がパラメータ ν の変形ベッセル関数に関係があることによる。

ベッセル過程の推移確率密度関数

ベッセル過程 BES_d の推移確率密度関数は, SDE (1) に対応したコルモゴロフ後進方程式 (Kolmogorov backward equation)

$$\frac{\partial}{\partial t} p(t; x, y) = \frac{1}{2} \frac{\partial^2}{\partial x^2} p(t; x, y) + \frac{d-1}{2} \frac{1}{x} \frac{\partial}{\partial x} p(t; x, y)$$

の解 ($1 \leq d < 2$ で原点に反射条件を課す) で与えれ,

$$p(t, y|x) = \frac{1}{t} \frac{y^{\nu+1}}{x^{\nu}} \exp\left(-\frac{x^2 + y^2}{2t}\right) I_{\nu}\left(\frac{xy}{t}\right)$$

となる. ただし, $I_{\nu}(z)$ は変形ベッセル関数

$$I_{\nu}(z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{\Gamma(n+1)\Gamma(n+1+\nu)} \left(\frac{z}{2}\right)^{2n+\nu}$$

であり, $\Gamma(z)$ はガンマ関数:

$$\Gamma(z) = \int_0^{\infty} e^{-u} u^{z-1} du, \quad \Re z > 0$$

を表す.

1. d -次元ベッセル過程 (BES_d) の性質

初期値を上付き添字で表し, $x > 0$ から出発した BES_d を X_t^x と書くことにする ;

$$dX_t^x = \frac{d-1}{2} \frac{dt}{X_t^x} + dB_t, \quad t \geq 0, \quad X_0^x = x > 0 \quad (3)$$

である .

ベッセル過程のスケーリング則 任意の $x > 0$ に対して

$$\frac{1}{x} X_{x^2 t}^x \stackrel{\text{(law)}}{=} X_t^1 \quad (4)$$

が成り立つ .

$x > 0$ から出発した BES_d が初めて原点に到達する時刻を T_x と記す ;

$$T_x = \inf \left\{ t > 0 : X_t^x = 0 \right\}. \quad (5)$$

SDE (3) は $t \leq T_x$ までは well-defined である .

定理 1.

(i) $d \geq 2 \implies T_x = \infty, \forall x > 0$ が確率 1 で成り立つ.

(ii) $d > 2 \implies \lim_{t \rightarrow \infty} X_t^x = \infty, \forall x > 0$ が確率 1 で成り立つ.

(iii) $d = 2 \implies \inf_{t > 0} X_t^x = 0, \forall x > 0$ が確率 1 で成り立つ.

(iv) $1 \leq d < 2 \implies T_x < \infty, \forall x > 0$ が確率 1 で成り立つ.

定理 2.

(i) $\frac{3}{2} < d < 2 \implies x < y$ に対して, $\mathbb{P}(T_x = T_y) > 0$.

(ii) $1 \leq d \leq \frac{3}{2} \implies x < y$ に対して, $T_x < T_y$ が確率 1 で成り立つ.

SLE $_{\kappa}$ と BES $_d$ の関係

Schramm は, 駆動関数を

$$U_t = \sqrt{\kappa}B_t, \quad \kappa > 0, \quad B_0 = 0$$

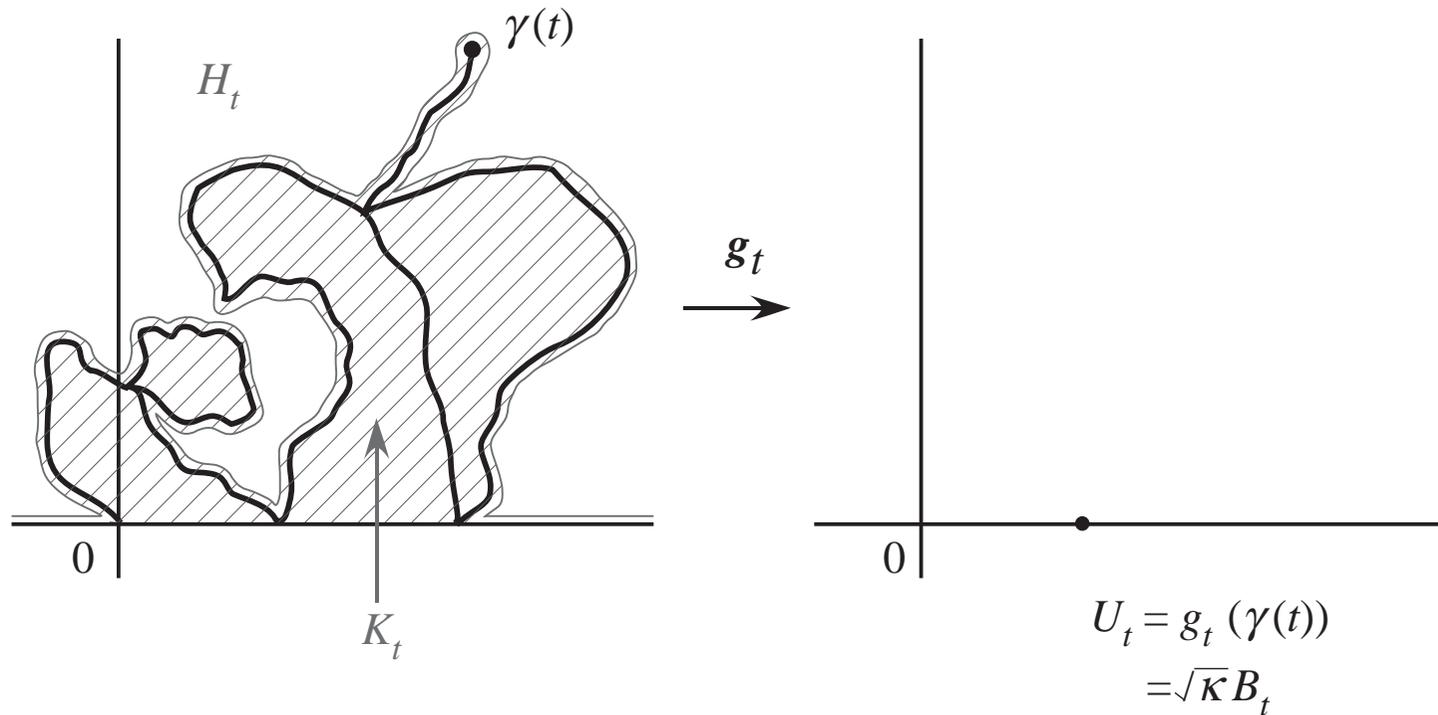
としたレヴナー方程式

$$\frac{\partial}{\partial t}g_t(z) = \frac{2}{g_t(z) - \sqrt{\kappa}B_t}, \quad g_0(z) = z \quad (6)$$

の解として得られる (時刻 $t \geq 0$ で径数付けされる) 共形変換の族 $\{g_t\}_{t \geq 0}$ を提案した. これは現在, (chordal) シュラム・レヴナー発展 (Schramm-Loewner evolution) とよばれている. 以下ではこれを, 径数 κ も付して, SLE $_{\kappa}$ と略記する.

$$U_t = \lim_{s \nearrow t} g_s(\gamma(t))$$

で定まる曲線 $\gamma = \{\gamma(t) : t \in [0, \infty)\}$ が確率 1 で定まることが分かる.



SLE_{κ} γ は一般には単純曲線ではない。以下，

$$H_t = \mathbb{H} \setminus \gamma[0, t] \text{ の非有界な連結領域}$$

$$K_t = \mathbb{H} \setminus H_t$$

とする。 K_t は SLE_{κ} 曲線 $\gamma[0, t]$ の hull と呼ばれる。上半面 \mathbb{H} 内の SLE_{κ} 曲線 $\gamma(0, t]$ と hull K_t は，共形変換 g_t によって \mathbb{H} から消去される。曲線の先端 $\gamma(t)$ は \mathbb{H} の境界である実軸上の 1 点 U_t に写されるのであるが，この点は $\sqrt{\kappa} B_t$ で与えられる。

SLE $_{\kappa}$ のスケールリング性

BM のスケールリング性が BES $_d$ に遺伝することを見たが、同様にこれは SLE $_{\kappa}$ にも遺伝する。SLE $_{\kappa}$ もスケールリング性をもつことが分かる。

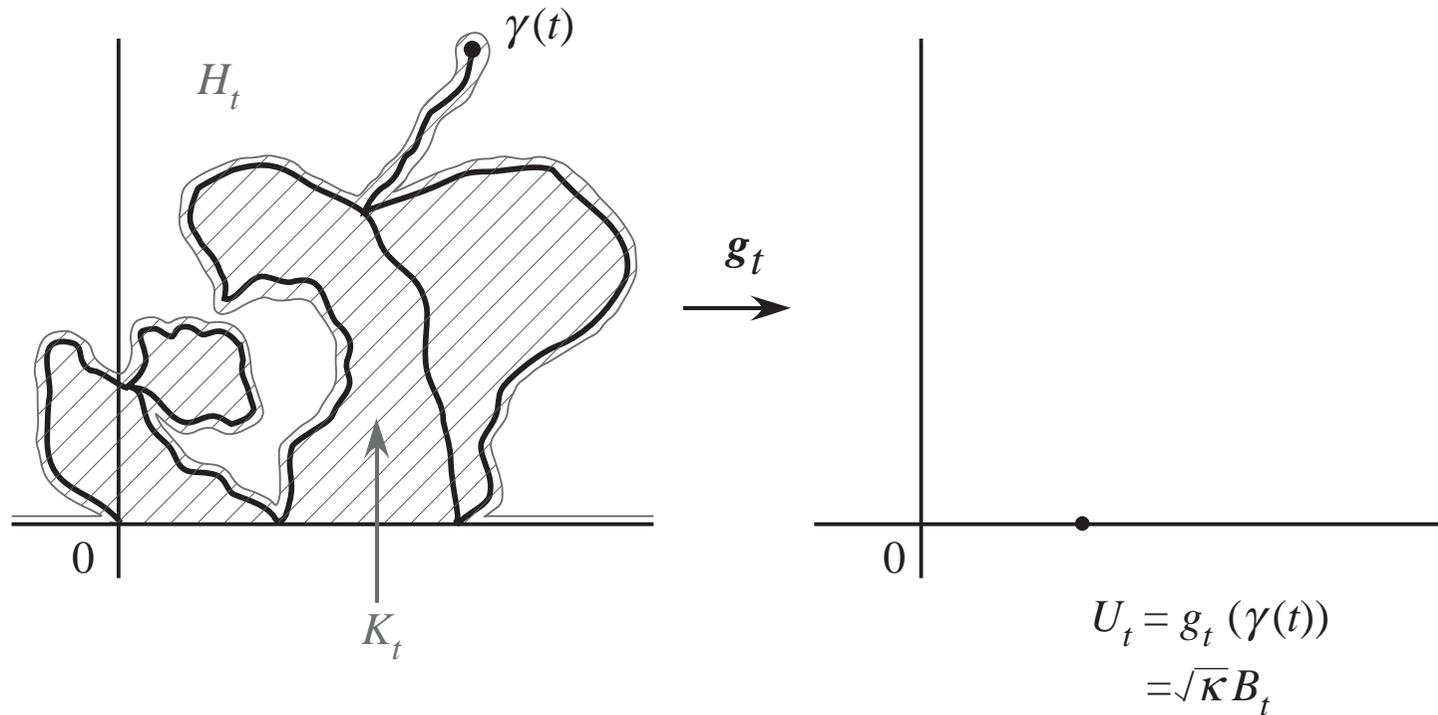
任意の $r > 0$ に対して

$$\frac{1}{r} g_{r^2 t}(rz) \stackrel{(\text{law})}{=} g_t(z)$$

が成り立つ。すなわち、

$$\frac{1}{r} \gamma(r^2 t) \stackrel{(\text{law})}{=} \gamma$$

である。



$$\begin{aligned}
 T_z &= \sup \left\{ t \geq 0 : \text{解 } g_t(z) \text{ が well-defined で } g_t(z) \in \mathbb{H} \right\} \\
 &= \inf \left\{ t \geq 0 : z \in K_t \right\}
 \end{aligned} \tag{7}$$

が定義される．これを用いると

$$H_t = \left\{ z \in \mathbb{H} : T_z > t \right\}, \quad K_t = \left\{ z \in \mathbb{H} : T_z \leq t \right\}$$

と表せる

$$\hat{g}_t(z) = \frac{g_t(z) - \sqrt{\kappa}B_t}{\sqrt{\kappa}}$$

とすると, $\hat{g}_t(z)$ は次の確率微分方程式をみたすことになる.

$$d\hat{g}_t(z) = \frac{2/\kappa}{\hat{g}_t(z)}dt + dW_t, \quad \hat{g}_0(z) = \frac{z}{\sqrt{\kappa}}, \quad W_t = -B_t.$$

ここで

$$\kappa = \frac{4}{d-1} \iff d = \frac{4}{\kappa} + 1 \quad (8)$$

とすると

$$d\hat{g}_t(z) = \frac{d-1}{2} \frac{1}{\hat{g}_t(z)}dt + dW_t \quad (9)$$

となり, BES_d の複素版に他ならない.

$\mathcal{R}[\hat{g}_t(z)] = R_t, \mathcal{I}[\hat{g}_t(z)] = I_t$ とおくと

$$dR_t = \frac{d-1}{2} \frac{R_t}{R_t^2 + I_t^2} dt + dW_t, \quad dI_t = -\frac{d-1}{2} \frac{I_t}{R_t^2 + I_t^2} dt$$

となり, 伊藤の公式を用いると

$$d(R_t^2 + I_t^2) = 2(d-1) \frac{R_t^2}{R_t^2 + I_t^2} dt - (d-2)dt + 2R_t dW_t$$

をえる. $\int_0^{r(t)} 4R_t^2 dt = t$ で定まる $r(t)$ で時間変更を行い, $Y_t = R_{r(t)}^2 + I_{r(t)}^2$,

$\tilde{R}_t = R_{r(t)}, \tilde{W}_t = \int_0^{r(t)} 2R_t dW_t$ (\tilde{W}_t はブラウン運動となる) とおくと,

$$dY_t = d\tilde{W}_t + \frac{d-1}{2} \frac{dt}{X_t} - \frac{(d-2)dt}{4\tilde{R}_t} = d\tilde{W}_t + \frac{1}{2} \frac{dt}{X_t} - \frac{d-1}{2} \left(\frac{dt}{X_t} - \frac{dt}{2\tilde{R}_t^2} \right)$$

をみます.

定理 1.

(i) $d \geq 2 \implies T_x = \infty, \forall x > 0$ が確率 1 で成り立つ .

(ii) $d > 2 \implies \lim_{t \rightarrow \infty} X_t^x = \infty, \forall x > 0$ が確率 1 で成り立つ .

(iii) $d = 2 \implies \inf_{t > 0} X_t^x = 0, \forall x > 0$ が確率 1 で成り立つ .

(iv) $1 \leq d < 2 \implies T_x < \infty, \forall x > 0$ が確率 1 で成り立つ .

定理 2.

(i) $\frac{3}{2} < d < 2 \implies x < y$ に対して, $\mathbb{P}(T_x = T_y) > 0$.

(ii) $1 \leq d \leq \frac{3}{2} \implies x < y$ に対して, $T_x < T_y$ が確率 1 で成り立つ .

定理 3.

(i) $0 < \kappa \leq 4$ のとき, γ は単純曲線であり, $\gamma(0, \infty) \subset \mathbb{H}$ である. また, このとき確率 1 で

$$\lim_{t \rightarrow \infty} |\gamma(t)| = \infty.$$

(ii) $4 < \kappa < 8$ のとき, γ は自分自身や実軸と接することがあるが, 確率 1 で

$$\bigcup_{t > 0} \overline{K_t} = \overline{\mathbb{H}}$$

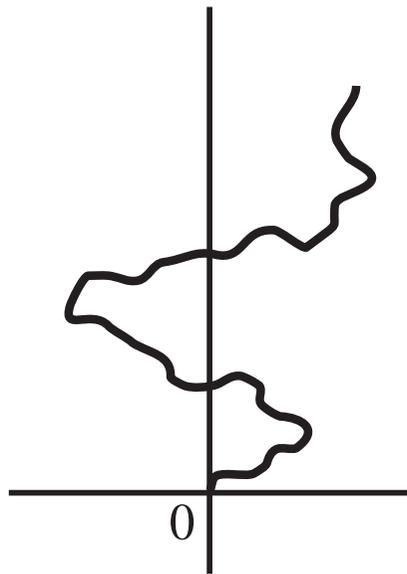
である. よって, $|\gamma(t)| \rightarrow \infty$ である. しかし

$$\gamma[0, \infty) \cap \mathbb{H} \neq \mathbb{H}$$

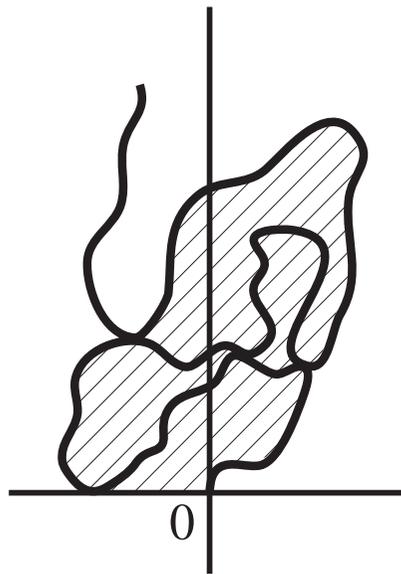
である. つまり, \mathbb{H} 全体を埋めつくすことはない.

(iii) $\kappa \geq 8$ のとき, γ は $\overline{\mathbb{H}}$ のすべての点を埋めつくす;

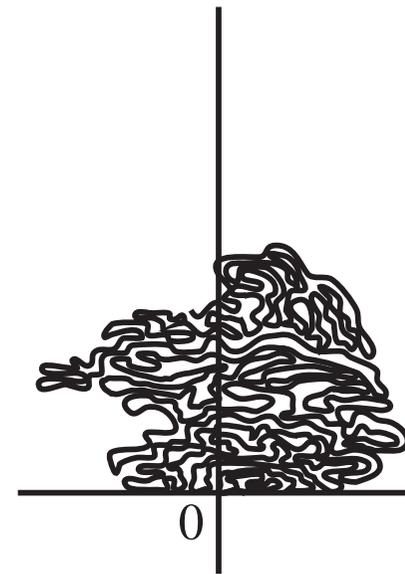
$$\gamma[0, \infty) = \overline{\mathbb{H}}.$$



(a)



(b)



(c)

(a) 実軸に接することのない単純曲線 . $0 < \kappa \leq 4$ のときの SLE 曲線の様子 .

(b) 自分自身や実軸に接するが十文字に交わることはない曲線 . 曲線が伸びていくと , 曲線で囲まれた領域 (斜線部分) は上半平面 \mathbb{H} を覆いつくしていくが , 曲線自身で \mathbb{H} が埋めつくされることはない . $4 < \kappa < 8$ のときの SLE 曲線の様子 .

(c) 上半平面 \mathbb{H} を埋めつくしていく曲線 . $\kappa \geq 8$ のときの SLE 曲線の様子 .

定理 1 の証明

$0 < x_1 < x < x_2 < \infty$ に対して

$$\sigma = \inf \left\{ t > 0 : X_t^x = x_1 \quad \text{or} \quad X_t^x = x_2 \right\}$$

として,

$$\phi(x) = \phi(x; x_1, x_2) = \mathbb{P}(X_\sigma^x = x_2)$$

と定義する．この定義から明らかに

$$\phi(x_1) = 0, \quad \phi(x_2) = 1$$

である． $t \wedge \sigma \equiv \min\{t, \sigma\}$ として, 確率過程

$$M_t = \phi(X_{t \wedge \sigma}^x)$$

を考える．これは

$$M_t = \mathbb{E} \left[\phi(X_\sigma^x) \middle| \mathcal{F}_t \right]$$

とも書ける．このとき

$$\mathbb{E}[M_t | \mathcal{F}_s] = M_s, \quad 0 \leq \forall s \leq t$$

が成り立つことは明らかである．つまり M_t はマルチンゲールである．

($\phi(x)$ の 2 回微分可能性を仮定して) 伊藤の公式を適用すると, BES_d の SDE (3) より

$$\begin{aligned} M_t &= \phi(x) + \int_0^{t \wedge \sigma} \phi'(X_s^x) \left[dB_s + \frac{d-1}{2} \frac{ds}{X_s^x} \right] + \int_0^{t \wedge \sigma} \frac{1}{2} \phi''(X_s^x) (dB_s)^2 \\ &= \phi(x) + \int_0^{t \wedge \sigma} \phi'(X_s^x) dB_s + \int_0^{t \wedge \sigma} \frac{1}{2} \left[\phi''(X_s^x) + \frac{d-1}{X_s^x} \phi'(X_s^x) \right] ds \end{aligned}$$

となる. M_t は局所マルチンゲールなので, 有界変動部分(ドリフト項)は零である. つまり

$$\phi''(x) + \frac{d-1}{x} \phi'(x) = 0, \quad x_1 < x < x_2 \quad (10)$$

という微分方程式が得られる. 境界条件 $\phi(x_1) = 0, \phi(x_2) = 1$ も課すと,

$$\phi(x) = \phi(x; x_1, x_2) = \begin{cases} \frac{x^{2-d} - x_1^{2-d}}{x_2^{2-d} - x_1^{2-d}} & d \neq 2 \text{ のとき} \\ \frac{\log x - \log x_1}{\log x_2 - \log x_1} & d = 2 \text{ のとき} \end{cases} \quad (11)$$

と定められる.

(i) $d > 2$ のとき, $2 - d < 0$ なので, (11) の上の式より, 任意の $x_2 = L > x$ に対して

$$\begin{aligned}\phi(x; 0, L) &\equiv \lim_{x_1 \rightarrow 0} \phi(x; x_1, L) \\ &= \lim_{x_1 \rightarrow 0} \frac{x^{2-d} - x_1^{2-d}}{L^{2-d} - x_1^{2-d}} = 1.\end{aligned}$$

つまり, $x > 0$ から出発した BES_d は, 確率 1 で, 原点より先に $L > 0$ に到達することになる. したがって, $T_x = \inf\{t > 0 : X_t^x = 0\} = \infty$ である. $d = 2$ のときは, (11) の下の式を用いて, 同様に

$$\phi(x; 0, L) = \lim_{x_1 \rightarrow 0} \frac{\log x - \log x_1}{\log L - \log x_1} = 1$$

となるので, やはり $T_x = \infty$ である.

(ii) $\alpha > 1$ をとって, $x_k = \alpha^k x, k = 1, 2, 3, \dots$ とする. $d > 2$ では $2 - d \equiv \beta < 0$ であり, (11) より

$$\begin{aligned} \phi(x_k; x_{k-1}, x_{k+1}) &= \frac{x_k^\beta - x_{k-1}^\beta}{x_{k+1}^\beta - x_{k-1}^\beta} = \frac{\alpha^{k\beta} - \alpha^{(k-1)\beta}}{\alpha^{(k+1)\beta} - \alpha^{(k-1)\beta}} \\ &= \frac{\alpha^\beta - 1}{\alpha^{2\beta} - 1} = \frac{1}{\alpha^\beta + 1} > \frac{1}{2}. \end{aligned}$$

である. 1次元格子 $\mathbb{Z} \equiv \{\dots, -2, -1, 0, 1, 2, \dots\}$ 上のサイト $n > 0, n \in \mathbb{Z}$ から出発して, 単位時間に右サイトにステップする確率が $p = 1/(\alpha^\beta + 1)$, 左サイトにステップする確率が $1 - p$ であるような非対称な 1次元ランダムウォークを考える. このような非対称な 1次元ランダムウォークは非再帰的である. BES_d をこのような 1次元非対称ランダムウォークと比較することにより, 確率 1 で $X_t^x \rightarrow \infty, \forall x > 0$ であることが結論される.

(iii) (11) の $d = 2$ の式で , 特に $x_1 = 1/n < x < x_2 = e^n$ とおくと ,
 $n \rightarrow \infty$ で

$$\phi(x; 1/n, e^n) = \frac{\log x + \log n}{n + \log n} \rightarrow 0$$

である . よって , 任意の $n > 0$ に対して , X_t^x が $1/n$ に近づくことが分かる .

(iv) $1 \leq d < 2$ のときは , $\lim_{x_1 \rightarrow 0} x_1^{2-d} = 0$ なので , (11) の上の式より ,
 $L \rightarrow \infty$ で

$$\phi(x; 0, L) = \frac{x^{2-d}}{L^{2-d}} \rightarrow 0.$$

よって , 確率 1 で $T_x < \infty$ である .

定理 2 の証明 次の関係に注意する。

補題 $0 < x < y$ に対して, 事象 $\{T_x = T_y\}$ と次の事象とは, 確率 0 の部分を除いて等しい;

$$\sup_{t < T_x} \frac{X_t^y - X_t^x}{X_t^x} < \infty. \quad (12)$$

$0 < x < y$ に対して, 次の確率過程を考える

$$Z_t = \log \left(\frac{X_t^y - X_t^x}{X_t^x} \right) = f(X_t^x, X_t^y), \quad t < T_x. \quad (13)$$

ここで $f(x, y) = \log\{(y - x)/x\}$ である.

$$f_x(x, y) = -\frac{1}{y-x} - \frac{1}{x},$$

$$f_y(x, y) = \frac{1}{y-x}$$

$$f_{xx}(x, y) = -\frac{1}{(y-x)^2} + \frac{1}{x^2},$$

$$f_{yy}(x, y) = -\frac{1}{(y-x)^2},$$

$$f_{xy}(x, y) = f_{yx}(x, y) = \frac{1}{(y-x)^2}$$

伊藤の公式を用いると

$$\begin{aligned}
 dZ_t &= f_x(X_t^x, X_t^y) \left[dB_t + \frac{d-1}{2} \frac{dt}{X_t^x} \right] + f_y(X_t^x, X_t^y) \left[dB_t + \frac{d-1}{2} \frac{dt}{X_t^y} \right] \\
 &+ \frac{1}{2} \left[f_{xx}(X_t^x, X_t^y) + 2f_{xy}(X_t^x, X_t^y) + f_{yy}(X_t^x, X_t^y) \right] dt \\
 &= -\frac{1}{X_t^x} dB_t + \left[\left(\frac{3}{2} - d \right) \frac{1}{(X_t^x)^2} + \frac{d-1}{2} \frac{X_t^y - X_t^x}{(X_t^x)^2 X_t^y} \right] dt \quad (14)
 \end{aligned}$$

が得られる．ここで，次の関係を満たすように，ランダムな時間変更 $t \rightarrow r$ を行う； $\int_0^{r(t)} \frac{ds}{(X_s^x)^2} = t$ ．つまり， $dr(t)/(X_{r(t)}^x)^2 = dt$ である．(14) を変更された後の時刻 $r(t)$ で考えると，

$$dZ_{r(t)} = -\frac{1}{X_{r(t)}^x} dB_{r(t)} + \left[\left(\frac{3}{2} - d \right) + \frac{d-1}{2} \frac{X_{r(t)}^y - X_{r(t)}^x}{X_{r(t)}^y} \right] \frac{dr(t)}{(X_{r(t)}^x)^2}$$

となるが，

ここで

$$\tilde{B}_t = - \int_0^{r(t)} \frac{dB_s}{X_s^x}$$

とおくと,

$$(d\tilde{B}_t)^2 = \frac{1}{(X_{r(t)}^x)^2} (dB_{r(t)})^2 = \frac{dr(t)}{(X_{r(t)}^x)^2} = dt$$

なので, \tilde{B}_t は BM である. そこで $\tilde{Z}_t = Z_{r(t)}$ と書くことにすると

$$d\tilde{Z}_t = d\tilde{B}_t + \left[\left(\frac{3}{2} - d \right) + \frac{d-1}{2} \frac{X_{r(t)}^y - X_{r(t)}^x}{X_{r(t)}^y} \right] dt \quad (15)$$

という SDE が得られる.

(i) $\frac{3}{2} < d < 2$ のとき, $d' \in (3/2, d)$ を選び,

$$\varepsilon = \frac{2(d - d')}{d - 1}$$

とおく. $y = (1 + \varepsilon/2)x$ の場合を考えることにする.

$$\sigma = \inf \left\{ t > 0 : X_{r(t)}^y - X_{r(t)}^x = \varepsilon X_{r(t)}^y \right\}$$

とする. すると $0 \leq t < T_x \wedge \sigma$ では, $(X_{r(t)}^y - X_{r(t)}^x)/X_{r(t)}^y \leq \varepsilon$ なので,
(15) のドリフト項の係数は

$$\left(\frac{3}{2} - d\right) + \frac{d-1}{2} \frac{X_{r(t)}^y - X_{r(t)}^x}{X_{r(t)}^y} \leq \left(\frac{3}{2} - d\right) + \frac{d-1}{2} \times \frac{2(d-d')}{d-1} = \frac{3}{2} - d'$$

と上から抑えられる.

そこで

$$d\tilde{Z}_t^* = d\tilde{B}_t + \left(\frac{3}{2} - d'\right) dt, \quad \tilde{Z}_0^* = \tilde{Z}_0 = \log \frac{\varepsilon}{2}$$

に従う確率過程 \tilde{Z}_t^* を考えると,

$$\tilde{Z}_t \leq \tilde{Z}_t^*, \quad 0 \leq t < T_{x \wedge \sigma}$$

である．ところが $d' > 3/2$ としたので， \tilde{Z}_t^* のドリフト項の係数は負である．よって \tilde{Z}_t^* は $\log(\varepsilon/2)$ から出発したものの，永久に $\log \varepsilon$ の値に到達できないという確率が正であることになる．よって \tilde{Z}_t も $\log \varepsilon$ に到達できない確率も正である．よって，正の確率で

$$\log \left(\frac{X_t^y - X_t^x}{X_t^x} \right) < \log \varepsilon \quad \iff \quad \frac{X_t^y - X_t^x}{X_t^x} < \varepsilon$$

となり，事象 (12) が成立することになる．よって補題より，

$$\mathbb{P}(T_x = T_y) > 0$$

である．

(ii) $1 \leq d \leq \frac{3}{2}$ のときは, $3/2 - d \geq 0$ であり, また

$$\frac{X_{r(t)}^y - X_{r(t)}^x}{X_{r(t)}^y} > 0, \quad 0 \leq t < T_x$$

なので, ドリフト項の係数は正である. よって

$$\sup_{t < T_x} \tilde{Z}_t = \infty \quad \iff \quad \sup_{t < T_x} e^{\tilde{Z}_t} = \sup_{t < T_x} \frac{X_t^y - X_t^x}{X_t^x} = \infty$$

なので, 補題より $\mathbb{P}(T_x = T_y) = 0$ である..

参考文献

G. F. Lawler, *Conformally Invariant Processes in the Plane*, (American Mathematical Society, 2005).

香取眞理, Summer School 数理物理 2009 「ベキ乗則の数理」における講義ノート (2009 年 8 月 27-29 日, 東京大学大学院数理科学研究科, 駒場)